

外 国人として異国で暮らしていると、差別を受けたり、解り合えない壁を感じたりして悲しくなることもある。『音楽に国境はない』『音楽は世界中で通用する言語だ』と言われる音楽界でも、差別は顕在する。この場合の音楽は西洋音楽を指すため、同じように感動することはできても、その道を極めようとする、日本人であることのハンディを思い知らされる事になる。もちろん邦楽も存在するが、近代日本人は、明治時代に伊澤修二がアメリカの音楽教育家メーソンとともに開発した文部省唱歌を用いた学校教育を受けているため、音楽を生業に選ぶと、その根底にある西洋音楽に遡る事を余儀なくされる。そこで異文化のハンディを乗り越えて初めて、西洋人と同じスタート地点に立つ事ができるのである。

幸い、現在世界で活躍されている日本人音楽家は沢山いる。それぞれの苦労話を綴って本にしたいくらいだが、スイスに暮らしている私達にとって、より身近なエピソードをお話したい。

例えばチューリヒには、ヨーロッパ伝統の音を誇るトーンハレオーケストラがある。そこで弾いている日本人演奏家を見る度に、「ヨーロッパ人でも夢のポストなのに、日本人が採用されるなんて、凄いなあ」と、同郷人として少々誇らしげに思っていた。そのトーンハレオーケストラが、去る11月にまだ震災の爪痕が残る中、中国・日本ツアーを決定した。一番古い日本人楽団員の廣田真二郎さんにお話をうかがうと、今までも4回の日本ツアーに同行しているが、毎回よりよい演奏になっているという。しかし、30年ほど前に廣田さんが入団した頃の日本ツアーは、「どうせ解るはずのない国に行って演奏する」という驕りが団員達にはあったようだ。

彼は日本人のハンディを音の響きと解釈する。昨今の日本人器楽奏者は、技術面においては認められていても、音楽性に欠けるような扱いを受けるのは、自分が出した音をどのような環境で響かせるのか、によるのだそう。ヨーロッパの気候の中で、古い教会などの建物の中で振動させた音こそが西洋音楽を支える音であって、日本にはあり得ないものだという。彼はその音を追い求めながらヨーロッパにたどり着き、今も奏で続けるためにこの地に留まっているのだそう。

彼らが出発する約1週間前、偶然音楽監督のディヴィッド・ツィンマンに出会った。16年前にこのポストにアメリカ人の彼が就いた時、「伝統の音が崩れる」と非難を浴びた彼も、似たハンディを背負っているのだろう。廣田さんの言うヨーロッパの音は、アメリカでも再現できないからだ。

放射能汚染を懸念した来日予定アーティストのキャンセルが続く中、彼らもまた、2度にわたりグリーンピースを呼んで公開説明会を開き、ツアーに出るかどうかの決断を楽団員に委ねた末、訪日することに決まると、若手の楽団員に聞いていたので、「日本に行ってお礼を感謝しています」と御礼を言うと、「こんな時だからこそ、日本に行くことには意義がある。反対者はあと、3人だけです」と話してくれた。

そこで気付いたのだが、大惨事の最中、積極的に日本の音楽界を支えようとしてくれたアーティストは非ヨーロッパ人が多い。最初の一人は、フィレンツェ歌劇場と共に来日して地震に遭ったインド人指揮者のズピン・メータ。2公演の後、イタリア政府の帰国命令で一度は日本を離れたが、自己責任ですぐに単独で戻って来てくれたのには驚いた。その他、メキシコ出身のローランド・ヴィラゾンはメトロポリタン歌劇場来日公演をキャンセルした

テノールの代役を務め、一銭も受け取らずに日本を後にしたそうだ。ハンディを乗り越えた者の強さなのかもしれない。

話 が脱線したが、一方で日本人が本家本元のヨーロッパに来て、西洋音楽を指導する立場になることもある。例えば、11月号の会報に広上淳一氏がアルガウ交響楽団に客演するという情報が載っていて、興味をひかれた。日本では中堅で仕事にも事欠かない指揮者が、スイス地方楽団を振るためだけに渡欧する意図は何なのか。早速取材に出掛けると、演奏が始まる前から嬉しそうな雰囲気楽団員が印象的だった。そこに登場した広上氏は、普段よりもより小さく見えたが、文字通り飛び上がりながら、ウェーバー作曲の歌劇『魔弾の射手』序曲を振っていた。そして楽団員は喜びと共に、一心に聴いていた。指揮者の意図する楽想を継続させる力が弱いように思われたその曲に続くモーツァルトのクラリネット協奏曲での緊張感の特筆に値し、日本人だからこそ成し遂げられたと言えるような緻密さで、色とりどりの織物のような音楽を聴かせてくれた。

「若い頃はキャリアを積む事ばかり考えていた。でも母校で教鞭を取るようになり、50代も迎えて、客演の声をかけてもらえる

だけで感謝でき、若手に自分の音楽を伝授したいと思える域に達せたので、喜んで出掛けて来た」と言う彼の話を聞いて、だからあんなに純粋に音楽性を追求できたのだと、納得した。日本人が西洋音楽を西洋人に説く事に関しては、「音楽の演奏に関しては、究極には国籍は関係ない。一流になればなるほど、そんな事を問題にする人もいなくなってくる」と笑った。

後日、お世話になったアルガウ交響楽団員から「私や多くの同僚にとって、広上さんと仕事をする事は大きな喜びでした。キャリア

を築いた人間が、これほど多くのユーモアを持ち続けていられるということは、音楽家にとって救いになります。」というメールをもらった。ユーモア精神は、必ずしも多くの日本人の得意分野ではないが、彼はそれをもって、今まで苦難を乗り越えて来たのであろう。彼は2006年からアメリカのオーケストラで音楽監督を務めていたが、そのポストに日本人を置くことを屈辱的に捉えていた評議委員が、団員との信頼関係を築き始めていた広上氏を、彼の提案した団員のための規則変更を理由に、その地位から引きずり降ろしたという。義理堅い日本人の性質を通せば出世街道からはずれる。それを「いつも貧乏くじばかりだから」と笑って話す彼は、国籍を越えて、純粋に音楽性で音楽仲間と理解し合っていた。

そんな彼に、スイスで頑張っている日本人を力づけるお勧めの曲を尋ねてみた。そのコロンバス交響楽団時代、父親の危篤の知らせを受け取ったが、ライブ録音コンサートを放り出すわけにはいかず、自分の人生、父親への想いと別れ、全てを注ぎ込んだチャイコフスキーの交響曲第5番を挙げてくれた。その録音はきっと私達に勇気を与えてくれるに違いない。もしも異文化の中で自分を見失いそうになっている人がいたら、下記の処方箋をお試し下さい。(写真は広上淳一氏とアルガウ交響楽団)

音楽の処方箋 文/中東生



第2回 異邦人

コロンバス交響楽団 広上淳一指揮 チャイコフスキー交響曲第5番 (幻想序曲『ロメオとジュリエット』と共に収録) 2008年3月ライブ録音 Columbus Symphony Tchaikovsky Symphony No.5 in E Minor